

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



(3)

山本菜穂子

さあ、平成19年4月。「青い森のほほえみプロデュース事業」と名付けたこの『ほほえみによる地域づくり』の取組が始動しました。

それは壮大な「仲間づくり」の始まりだったのだと、今ならはっきりとわかります。

でも、当時は、「県民に『ほほえみプロデューサー』になってもらう」ということが、いったい何をする事なのかしっかりとイメージできていませんでした。講習会を開催し、参加してくれた人に講師になってもらって次の講習会を運営していく、そんな「仕事」になるだろうという表面的なことしか。

事業を形にしていくときに、事業担当者がイメージしたとおりのものをつくれたらそれは大成功で、結局事業担当者がイメージできた以上のものなどは出来上がるはずもないことは、それまでの3年にわたる健康福祉政策課での経験でわかっていたことでした。その意味で言えば、この取組が大きく発展する可能性なんて本当に低かったと思うのです。(高柳先生がしっかりイメージを持っていてくださったということはとても

大きいのでしょうか。でも、実は後々先生から、「最初、ほほえみプロデューサーを2万人養成することを目標にしましょう、とあなたに言ったものの、きっと無理よね～、どうなっていくものかしらと思っていたのよ。」と話されたことがあります。ま、当然、私よりはずっとしっかり見えていたものの、それでも誰も何が起るのかわからなかったと言っても過言でないかな～)

<仲間づくりの基本姿勢>

そんな暗中模索の私に役立ったのは、こんな基本姿勢だったのではないかと考えています。

私には、児童相談所に勤め始めた頃(もう20年以上前になるのか・・・)、当時の先輩から言われた忘れられない言葉があります。それは、「誰のために何をするのか」「目的と方法は合っているのか」「ことばと行動や態度は矛盾していないか」それは、当時、心理判定員(現在の児童心理司)として働いていた私への言葉です。新米の心理判定員として私は、子どもに知能検査や性格検査などの心理検査を行い、そのデータや児童福祉司

が調査してくれた子どもの生育歴や環境状況などから、その子が問題とされている行動が何から来るのか、そして、今後どのように改善していきける可能性があるのか、そのために何をしたらいいのか等々を分析し、心理判定意見書にまとめ上げる仕事をしていました。心理判定意見書を書く私は、そのころいつもとても緊張していました。こんなことを書いて間違っていないだろうか、先輩はこれをみてどう思うだろうか。自信もなく、他人の目や自分への評価がとても気になっていました。その時に言われたことばです。「あなたは何をしようとしているのか？子どものことを知ろうとしているのか、それとも判定意見書を上手にまとめようとしているのか？誰のためにそれをするのか？完璧を求めているのか？誰のために？失敗しないようにと一生懸命なの？どうして？ここに来る子ども達も保護者も、きっとどこかで失敗したと感じた人たちでしょう。あなたが、そんなに失敗を恐れている、一体あなたは彼らに何を伝えたいの？」

失敗したと思ったら、別な方法を試してみればいい。またそれもうまくいかなかったら、また別な方法を探せばいい。大丈夫、きっとやり直しがきく。

そう伝えたいというあなた自身はそのことを信じていないの？人はその人が言ったことばでなく、その人がどんな行動を見せるかで、ことば以上に想いを感じていくものだよ。そ

のとき、私はそう教わったと思っています。

そのことは、この事業にも当てはまりました。

私は「ほほえみ」でつながる地域をつくりたい。であれば、まず、自分の身近な仲間は、自分と「ほほえみ」でつながっていることができなければ。それが実践できたら、自分にも「ほほえみの地域づくり」の実現がもっと信じられるようになるだろう。そしてその行動と実践自体が、周囲にも「ほほえみの地域づくり」の実現を信じてもらうことになるだろうということ。ことばよりも、そのことが大きな力を持つことになるだろうということ。

そして、もっと言えば、その「ほほえみの地域づくり」で私がしたいのは、県民を守ることであって、(例えば事業を成功させるために) 県民を利用することではない、ということ。うまく伝えられている気がしないのですが、この感覚の微妙な違いが常に意識されていることはとても大切だったと思っています。

<初年度の事業スケジュール>

さて、約束された事業期間は2ヶ年。(それは後に県民の後押しによって3年目、4年目を迎えることになるのですが) その間に全く初めてのことを組み立てて実施し、何らかの結果を生み出し、そして、可能であればそれまでに作った仕組みなり方法なりをその後も定着できる形にせよ、ということなのです。そのため

の2年という月日を皆さんは長いと感じるでしょうか、短いと感じるでしょうか。

実はこれはとてもとても短いと私は思っています。

連載の初回で書いたように、私は本庁勤務の初めの3年間を健康福祉政策課企画政策グループで過ごしました。当時私が手がけたのは、「虐待・DV等家族援助マニュアル」の作成でした。なにそれ？なのですが、「児童虐待」「DV」「高齢者虐待」何れも家庭内で強いものから弱いものへの不適切な関わりという同じメカニズムで生じているのではないかとあれば、もし「児童虐待」でこの家族に関わったら、「高齢者虐待」の有無にも目を配りましょう、「DV」の有無にもアンテナを張りましょう、そして「家族」を支援する視点でそれぞれの問題に専門的に関わる機関と連携しましょうというマニュアルです。ね、これもわかりにくいでしょう。これもね、まず、この考え方をそれぞれの関係機関に理解してもらって、一堂に検討の席に着いてもらうことからたいへんで。それぞれの掘ってたつ法律の理解からはじめ、立場の違い、できることとできないことを挙げながら、どの部分で、どういう方法なら連携が可能なのか整理して・・・何とかつくりあげたものの、2ヶ年ではそこまでが限界で。結局、周知に十分な時間をかけられず、定着まではあと一歩足りなかったと思うのです。

その時の経験から、今回は走り始

めたら途中で立ち止まっている時間はない、ということだけは感覚的に理解していました。

私には、納得しないと次に進めなくなる悪い癖があり、でも今回幸いなのは、そんな私だけでなく、高柳先生が全体スケジュールの要を担ってくれていることでした。お忙しい先生のスケジュールは必然的に先に押さえる必要があり、年間の講習会のスケジュールはその段階で決まり。あとは、その日程にちゃんと開催にこぎ着けられるように、逆算して講習会への参加者募集の手続きを行い、並行して県民への事業広報を頻繁に行いながら、機運の醸成を図っていけばいいのです。ハハハ、言うのは簡単。。でも。。

平成19年度の養成計画は、

7月23日（月）～27日（金）の4泊5日「コア笑いプロデューサー養成講習会」

7月26日（木）一般県民向けの講演会「ほほえみと笑いの集い」

*「コア」の講習会中に一般県民500名を募集する高柳先生の講演会を開催する。コアにとってはデビュー戦。ここで、そこまで3日間の講習成果を披露しながら人前に出る。今後、講師として前に立つ人材になってもらうための練習の一環。

養成された「コア」を各地区の笑いプロデューサー講習会のスタッフとして巻き込みながら（「コア」がスタッフ参加するための旅費等は予算化しておらず。手弁当参加。だから、

依頼でなく、文字どおり“巻き込んだ”という表現と感じています。)以下の5地域で「笑いプロデューサー講習会」を実施

8月8日(水)～10日(金)の3日間「弘前地区笑いプロデューサー講習会」

8月17日(金)～19日(日)の3日間「青森地区笑いプロデューサー講習会」

8月27日(月)～29日(水)の3日間「八戸地区笑いプロデューサー講習会」

9月14日(金) 「ほほえみプロデューサーモデル講習会」

*「笑い」の養成講習はまだ2箇所を残していたが、「笑い」の養成が終了次第、次は3層目の「ほほえみ」の養成に入る必要がある。「ほほえみ」の講習会はそれまでの「コア」や「笑い」の講習会とは違い、1時間という設定。まだ誰も経験したことがない。まずは高柳先生に見せてもらって1時間講習を理解しておかなければ。そのための講習会。その後の「ほほえみ」講習会は高柳先生がやってくれるのではなく、「コア」と「笑い」とで講師をしなければならないのだから。つい先日まで、人前で「講師」となることなど想定もしていなかったであろう仲間だけで。

9月21日(金)～23日(日)の3日間「下北地区笑いプロデューサー講習会」

10月15日(月)～17日(水)の3日間「上北地区笑いプロデュー

サー講習会」

11月～「ほほえみプロデューサー講習会」始動!

*結果として、この年度内に64回、2,194人を養成することになる講習会がここからスタートした。講習会の講師となるために、もう少し知識・技術の定着や、「コア」と「笑い」を仲間にするための一手間が必要と判断し、県内5地区で「活動実践レッスン」を開催した。

11月17日(土)「弘前地区活動実践レッスン」

11月23日(金・祝日)「八戸地区活動実践レッスン」

12月1日(土)「下北地区活動実践レッスン」

12月8日(土)「上北地区活動実践レッスン」

12月15日(土)「青森地区活動実践レッスン」

<ほほえみ隊の連携>

あ～ここまでスケジュールを並べてみただけで疲れてきました。今更ながら、当時、よくこれだけのスケジュールを乗り切ってきたものだと思います。

スケジュールを見てわかるとおり、参加してくれる人たちが便利なようにという考え方で、講習会の曜日はウィークデーだけでなく土日や祝日も設定しました。もちろん、この間、私たち事業担当者は出張ばかりしているわけです。講習会に必要なパソコンやプロジェクター、資料一式、お茶セット♪など、大荷物を抱えて、

まるでキャラバン隊。誰が言い出したか、私たちは「ほほえみ隊」でした。

よく、内に対してと外に対してと態度の違う人っていますよね。そういう人の外向けのことばをあなたは信じられますか。そう、私たちの仲間づくりは「コア」から始まったわけではなかったんです。それは、この「ほほえみ隊」から始まっていたんです。当時はその重要性にそれほど気付いてはいなかったけれど。

さて、そのほほえみ隊はどうやって「仲間」になってきたのでしょうか。

考えてみれば、第2回で書いたように「笑顔のほとんどないリーダー」を迎えたときに、「この人を笑顔にできるかどうか、それが事業成功のバロメーターだね」と苦し紛れに出たあの一言は、とても的を射たもので、あれが事業の成否を決めたという気もしてきます。あの人事がなければ、身内である職員の笑顔のことなどこんなに意識しなかったのではないかと思います。あの時あんなにショックだった人事は、実はこんなに素敵な仕掛けだったのですね。さあ、これはほほえみの7か条の第3条と第4条。「たいへん」「でも、こう考えてみよう」そのものです。たいへんだと思えることの見え方が変わると、そのことの持っているプラスの側面が見えてくる、それが笑顔につながるきっかけを連れてくる。

それともう一つ仲間づくりに役立ったこと。実は、私はとても寂しが

り屋です。(何を急に書いているのかと言われそう) 誰かの役に立ちたいし、そのためならすごくすごく頑張れるけど、労ってもらうことや誉めってもらうことが必要なんです。というか、その方がより頑張れる人間なんです。そして、とても不完全な人間です。苦手なことがたくさんあります。でもこの二点は、別に私に限ったことでなく、あなたも、あなたも、程度の差こそあれ、そうではないですか。とにかく私は自分のことをそういう人だと思っていて、でもだからこそ、仲間が必要で、仲間をつくる能力のある人間なのではないかと思えます。

私は、「こうしたい」「こうあるべきだ」というビジョンを持つことができます。そしてそのために「何をしたいか」ということのアイディアも少しは出せます。でも、そのための事務作業の手順を考え、計画的に取り進めることはとても苦手です。必要な資料や報告書などをわかりやすくファイリングしていくことなどもとても不得手です。あ、それから結構八方美人なので、はっきりと断るということもとてもとても苦手分野です。

すごく勝手な言い方をすると、できないからその分野が得意な人への感謝もできるし、素直に尊敬も感じます。あの、また横道にそれますが、機関連携が大切って言われて久しいですが、うまくいかなかった経験をお持ちじゃないですか。相手には“できないこと”をそれとは気付

かず無理に求めて決裂する連携会議を何度経験してきたことか。連携する時ってお互いに“相手は何ができないか、何が苦手分野か”をちゃんと知っていることがとても大事だと私は思っています。自分のできないことをやれる機関には感謝できるでしょ。相手のできないことを自分が補えるかどうかを考えればいいのでしょ。そうやって作った連携は、いがみ合わずに協力できる気持ちの良い連携として継続するのだと思います。ほほえみ隊は、本当にまるで神様が集めてくれたかのように補いあえる関係がつくれていったと感じています。本当にそれは幸いでした。もし私たちが仲違いしていたら、そんなことですり減っていたら、あのスケジュールはこなせる中身ではなかったでしょうから。

複数の講習会の募集を同時進行しなければならぬ状況にあって、事務作業の計画的な推進は、SさんとOさんが事前事前にテキパキと。契約書の作成などはKリーダーとOさんが本領発揮。記録用の写真撮影やファイリングはSさんが完璧に。そして県事業としての方向性を誤らないように羅針盤の役目もしながら様々な外圧に「ダメ」を出して守ってくれるのはKリーダーがきっちりです。

時に周囲から、「山本さんばかりが目立つところを担って、SさんやOさんは気の毒」みたいな心ないことばが伝わってくることもあってなかった訳じゃないです。でも本当に私た

ちはお互いに感謝しあえる仲間でした。お互いにしょっちゅう「ありがとう。」「これはすごい。」「いてくれて助かった。」等々と本気で口にしていました。本当にそう思ったから。これはほほえみの7か条の第1条と第2条の実践でした。労いあい、相手の良いところを口に出して伝え、そうして、私たちはしょっちゅう笑い合っていました。

＜そしてコア養成講習会へ＞

まだできたての4人のほほえみ隊は、まず、初回の養成講習会の準備に取りかかっていました。

人財養成の仕組みに則り、「ほほえみの7か条」を学び伝えられる力を持つ人を養成する。まずは「コア笑いプロデューサー」と名付けた、この事業の中核となって講習活動をひっぱってくれる人材の募集から入りました。

そのころ私の頭には、まだ、この取組の中心を担う仲間達がどんな人たちになるのか、わかっていませんでした。市町村職員、教職員、保健師、児童相談所の職員、それから……。とにかく、そんな職業集団をぼんやりと思い描いていたと思います。でも、そういう職業の皆さんは基本的に常に忙しいのです。その人達を、圧力をかけるかのようにして動員して集めることは、どこか違うと強く思っていました。それこそ先程の「県民を守るのか、事業の成功のために県民を利用するのか

の違い」の感覚です。強制された感覚で集まった人たちと、想いを同じくして仲間になることは難しいのではないかと感じていました。本当に本気でほほえみの地域づくりをしたいと、高柳先生も私たちも思っていましたから。規定の人数が集まればそれでいいなどとはこれっぽっちも思っていないでした。

一体誰とこの地域づくりを進めるのか、はっきりとイメージできないまま、募集は、県内毎戸配付の県の広報紙を中心に行いました。「笑いやほほえみの効果について一緒に勉強してくれる人、そして、それを他の県民に伝える講師になってくれる人を募集します」と。「資格は問わない」「興味を持った県民はどなたでも応募可能」「ただし、事前に高柳先生指定の書籍を読み、感想とこの取組に寄せる思いをつづったレポートを提出すること」それが、応募の条件です。

このレポートについても、当初高柳先生からその提案があったとき、私は「え～そこまでするの？」と正直思いました。でも、これによって、ただ面白半分に応募はシャットアウトすることができましたし、何よりも、この、“聞いただけでは何をすることになるのか理解が難しい取組”について、参加者がどう理解して応募したのかを確認することができたのです。

そうです、「看護師をしていたときから笑顔が患者さんを癒すことに気がついていたので勉強したい。」と書

いてきてくれた方もありましたし、中には、「お笑いの勉強をしていて、一つでも多くのギャグを学びたいし、笑わせられる技術を学びたい。」と書いてくれた方もありました。そのレポートで可否をつけると広報していましたが、実際には、このレポートで参加をお断りした方はありません。そうではなく、高柳先生の指示により、私たちほほえみ隊が講習前日までにそれら全てに目を通し、レポートの要点を箇条書きにして共有し、それぞれの方の応募の動機を把握し、この講習中に感じるだろう違和感を先に察知し、フォローするために使われました。そういったところの高柳先生の心配りは本当に丁寧で、「人を大事にするということはどういうことか」と、とてもとても参考になりました。

さあ、そして「コア笑いプロデューサー養成講習会」には結局34名が集まってくれました。この取組の趣旨を理解してくれるだろうか、賛同してくれるだろうか、高柳先生の指導をどう感じるだろうか、その後の講師も引き受けてくれるだろうか、そして仲間になれるだろうか。

実は、4泊5日の講習には私自身も「コア笑いプロデューサー」になるために、参加していました。講習では、「ほほえみの7か条」を一つ一つ理解するためのプログラムをこなしていきます。高柳先生はサプライズが大好き（深く学ぶための手法として）で、参加者には極秘に進めら

れる講習内容や準備物品など、私にも知らせられないものもあり、それらの準備は全てSさんとOさんにお任せです。

私の役割は自分自身も講習を体験しながら、参加者の様子に気を配り、落ち込んでいないか、不満を吐き出せずにいるんじゃないか、何を理解しきれていないのか、と。そう、当時、「コア」の彼ら彼女らは、私が考案した事業の参加者であり、私が守らなければならない存在だと感じていました。この4泊5日で何が起きるか、とにかく初めての経験です。プログラムの中には、これまでの自分の人生を振り返る内容もあり、その中で、様々なマイナスの経験が蘇る可能性も感じていました。私は、この4泊5日の講習に参加してくれた皆さんに、良い変化が起きることを大いに期待していましたが、同時に、マイナスの変化を生じさせたままお帰りいただくというわけにはいかないと、強く思っていました。私がつくりたいのは、「ほほえみに満ちた地域」。それは、ここに参加してくれた一人一人がつくるものであり実践してもらうもの。先生は、この講習で人生を変えるほどの変革を求めている。このような活動にリーダー的存在として踏み込んでもらうためには、確かにそんな変革が必要なのだろうと思える。だから、私は、先生のプログラムをバックアップする。でも同時に、マイナスの気持ちを引きずらずに終われるよう、参加者を守るためにも動こうと。それが先生

をサポートすることにつながる、私のやるべきことだと、日が経つに連れてそんなことを考えるようになっていました。

<仲間は仲間を呼ぶ、らしい>

そして、ほほえみ隊はというと、最初の「コア」の講習会が終わるまでは、Kリーダーを除く3人で動いていて、まだ高柳先生との関係も慣れておらず、講習会自体も初体験で、何もかも手探り状態でストレスも高く、4泊5日の隔離状態で事業を推進していると、世の中から隔離されて取り残されていくような気分になっていました。多分、忙しくて疲労もたまっていたからでしょう。私だけでなく、3人とも、一触即発の危機感を感じていたと思います。ここで何か相手に文句を言い出したら、取り返しがつかないことになると。そんなときに、アクシデントも起きるのですよね。録音用の機材が動かないとか電池が足りないとか些細な。でも、そんな状態であっても、私たちはお互いを気遣う気持ちを持ち続けることができました。お互いに、責めずに前に進む、労いと感謝を伝え続ける、ということを継続していました。これはたまたまできたというだけではありません。これは努力です。そして、ここの最も困難だと思われる初回の4泊5日を3人で乗り切れたことの達成感と相互への信頼感の心地よさが、この事業を進めていく原動力になりました。私の中では、「この感覚を、『コア』とも『笑

い』とも作っていけばいいんだ」という実感を持つことになりました。

他の仕事でこの4泊5日に参加できなかったKリーダーは、きっと内心つまらなかつたのでないかと思っています。だからせめても労をねぎらおうと(?)その後2年間に渡って、彼が節目節目に計画してくれたインフォーマルな会合(飲み会とも言う)は、結構私たちの凝集性を高めるのに効果的でした。私も飲み会は好きですが、結構生真面目ですので、そういうインフォーマルな方法と一緒に発散しながら次のエネルギーを蓄えるというような設定はなかなか自分からは主導できなかったと思います。でも、これがなかったら、ただ忙しい生真面目な集団は破たんを来していた様な気がします。そう、この事業の効果を実感できるまで1年近くは、私たちを支えたものの一つは、滅多に人を誉めそうもない(イメージですよ、本当は違うのですよ)Kリーダーからの労いのことばと労いのインフォーマルミーティングだったことはまんざら嘘じゃないと感じています。蒲生氏郷みたい?・・・

そして、実は、それから先もずっと私たちとこの事業を支えた大きな力となったのは、こんな「コア」や「笑い」の感想でした。

「県職員のスタッフの皆さんが、和気藹々としたこの取組を進めているのを見てみると、自分も仲間になりたいと思いました。」「県職員にも、こんなにざっくばらんで温かい人たち

もいるんですね。」ね、最高の誉め言葉でしょ。(でもちょっと最初のイメージが悪すぎる?県職員ってそんなに?)

講習会の内容はもちろんですし、事業目的への賛同ももちろんですが、そこにプラスして、私たち事業担当者が、まず、信頼し合う姿勢を見せ続けることができていたから、それが心地よさそうに映っていたから、私たちが想いを込めて推進しようとしているこの取組も信頼してくれたのだろうと思っています。そして、仲間になりたいと言ってきて、共に歩いてみてもいいかなと。「コア笑いプロデューサー養成講習会」が終了し、とにもかくにもそんな第一歩を踏み出すことができたようでした。そして34名の仲間が誕生しました。その仲間のことは次回にでも改めて。最近では、もう私が守るべき相手ではなく、私を守ってくれる頼もしい人々です。